

同協議会代表の徳永和宏さんは「廿日市がバラの産地だということを知ってほしい」と強調する。「フードマイレージ（注2）」という言葉がありますが、バラにも当てはまると思います。消費地と生産地が近ければ、それだけ新鮮なものが手元に届きます。産地が近くにあれば、むしろ、消費者にこそメリットがあるという。

また、広島県花卉園芸農業協同組合バラ部会と日本ばら切り

注1 父の日の花

1909年にアメリカ・ワシントン州のジョン・ブルース・ドッド夫人が、教会の牧師にお願いして父の誕生月6月に父の日礼拝をしてもらったことがきっかけと言われている。自分を男子1つで育てあげ、亡くなった父を讃えて墓前に白いバラを供えたとされている。

注2 フードマイレージ

食料の輸送距離の意味。食料の輸送量と輸送距離を定量的に把握することを目的とした指標ないし考え方。食糧の輸送に伴い排出される二酸化炭素が、地球環境に与える負荷に着目したもの。



フリーレット

赤と白の絞りが特徴のスプレーバラ。フランス語で「小さな花」という意味。小振りながら存在感がある。



ピックマニッシュ

とくなが園芸オリジナル品種のスプレーバラ。花びらの先はピンク、中は白の2色咲きで、花の大きさは約4cm。



広島市中央卸売市場中央市場花き部  
 榎花満 常務取締役  
 ふじもと・かつひろ  
 藤本 勝弘さん（52歳）

廿日市のバラは、品質でも全国トップクラス。独自のブランドを追求してほしいー

広島市場で取り扱う切りバラは、海外からのものも含めて昨年度で約400万本です。その内、広島県内産が約185万本、廿日市産は約74万本と県内では約4割を占め、圧倒的な出荷量を誇っています。それを4者で行っているというのが驚きです。

それぞれの農家さんが、品種ごとの特性を捉えて育て、花持ちがいいのが特徴です。品質管理にも特別に気を使い、人が生活する部屋よりも、バラのハウスのほうが快適なぐらいに温度管理がされています。

同じ品種でも、ほかの産地のもの

のと比べてみると色が格段に違うのはそういった努力の積み重ねなんです。もともと広島県産のバラは全国的に見ても品質が高いですが、その中でも廿日市産はトップクラスにあります。

何より「廿日市産のバラ」というブランドを浸透させることが大事ですね。今までは、販売する側がブランドを作ってきましたが、これからは消費者がブランドを作る時代です。

廿日市のバラが日本の頂点にいたいことを市民の皆さんにもっと知ってもらい、誇りに思ってもらいたいですね。

産地からのメッセージ

廿日市市で切りバラを生産する4者は、平成25年に「廿日市バラ推進協議会」を立ち上げ、バラの産地を知ってもらおうと、その普及に取り組んでいる。約10年前には、点在する4軒が1カ所に集約して生産性を上げるバラ団地をつくる構想もあった。

花協会広島支部では、父の日に広島県知事へのバラの花束贈呈を30年以上も続けているほか、広島東洋カープ、サンフレッツチェ広島、広島交響楽団にも花束を贈呈している。

同バラ部会長を務める則貞幸夫さんは、「8年前から始まったカープ選手への花束贈呈は、今ではすっかり定着し、カープファンの方たちにも喜ばれています」。このアイデアは則貞さんの発案によるもので、毎年父の日の前に行われている。

「今の活動を継続しながら、今後新たな展開を考えていきたいですね」と、則貞さんはバラの産地のアピールに尽力していくと話してくれた。



6月9日、「市民の父」である眞野勝弘市長にバラの花束を贈呈した。協議会を代表して眞野市長にバラの花束を贈る竹田智恵さん（写真右）。

産地からの発信ー

市内の切りバラ生産農家4者は、昨年「廿日市バラ推進協議会」を立ち上げ、廿日市産のバラの普及に取り組んでいる。市内外でのさまざまなイベントで、バラの産地からのメッセージを発信しているー。



写真\_1 フラワーバレンタインのキャンペーンとして、廿日市バラ推進協議会が製作。約20品種400本のバラで作ったハート型のオブジェ。真紅や黄、白、薄紫など鮮やかな色合いで近づくとき甘い香りを漂わせた。中央に入って写真撮影できる工夫も。写真\_2 けん玉ワールドカップのオブジェとして製作され、会場に飾られた。高さ2mを超え、バラの産地を世界にアピール。写真\_3 毎年父の日の前に、バラ生産者の子どもや孫から、カープの選手にバラの花束が贈られる。抱えきれないほどの花束のプレゼントに、選手も笑顔であふれる。

